

『私たち国民と自衛隊が打つ次の一手』（平成27年5月5日）

大阪防衛協会女性部 森田 芳子

今年の漢字は『税』だそうだ。でも、本当のところは色々なウソがあらわになった『露』だと思う。

第一、『税』にもウソがあったようで、安倍総理が消費税を上げる時期を引き延ばすと決めようとした時、「増税しないと日本が潰れる！ 大変なことになる！」と言いまくっていた経済評論家達、今はどうしてるんでしょ？

野田前総理に至っては「約束を破るなんて信義にもとる」と非難していたけど、この人、ご自分の趣味で政治をしていたらしい。国民の為じゃなかったのね。

財務部の元OLだった私でも、あの時期の消費税アップはムチャだと思うし、決まっている事だからと増税しようとした財務省は、お行儀が悪すぎる。官僚が、自分達の都合を優先して国民のサイフに手をつっこむなど、言語道断である。

朝日新聞の数々の握達記事も大変な騒ぎになった。何度謝罪し、代表者が替わっても、悪意のある作り話が掲載されるのは、朝日新聞社という組織そのものがおかしいからだ。昨年、大騒ぎになった「STAP細胞問題」では、朝日新聞も理化学研究所を批判したはずだ。多大な税金を費やして、無いものを有ると偽ったウソを発表したと非難したなら、朝日新聞が慰安婦報道で世界中に虚偽を発信し、日本の名誉を損ね、外交問題にした事は、それ以上の国益と税金の損失だ。中国や韓国を「日本を非難すれば補償金が取れる」と考えるタカリ国にしてしまった罪も重い。

理研を非難したなら、朝日新聞社も同様に非難されて当然だ。

ウソや憶測はニュースではないし、そんなものを載せるところが、社会の公器や木鐸に乗ってはいけない。いっそ「新聞」という肩書を返上して、自分達の主義主張を喧伝するプロパガンダ紙だと表明すればイイのに。「朝日紙（あさひがみ）」でも買う人はいるんじゃない？

理研のSTAP問題と朝日新聞の糧造記事問題は、横領事件にとっても似ている。

横領事件が発生するウラには、いい加減でユルい構造と、無責任な上司が必ず存在する。

組織の方針に合っていると、当然あるべき検査や検証もせず、ラクな方を選んで手柄や利益を優先することが原因だ。悪いのは、やらかした当人ではあるが、残念ながら組織の欠点が追及されることは、ほとんどない。

STAP問題の検証実験の記者発表で理研のエライさんが「こんな検証は科学の世界には馴染まない。若い科学者の芽を摘まないで下さい」と発言して「小保方氏の擁護か」と非難されたが、アレこそが問題を小保方氏という個人が起こした特殊な事件だと切り捨て理研には非がないとして、自分の地位や組織を守ろうとする発言なのだ。事件があらわになった会社の役員がよくやる手口だ。

だから、朝日新聞社が「糧造記事は、あの記者が悪かっただけ」で、社長を替えて問題を終わらせるなら、まだまだ記事の捏造は続くだろうし、そんな組織が新聞社を名乗る限り、新聞そのものが信頼を失って行くだろう。

捏造記事を書いて、今は自分の職を守る為に訴訟を起こしている元記者に聞きたい。

あなたは会社のお金を横領して罪を償いもせず、反省もしない人に「また経理をまかせよう」と思いますか？

週刊新潮に掲載された座談会「STAP細胞」とは何だったのか？（2014年8月28日号）で榎本英介近畿大学医学部講師は、こう言っている。

「小保方さんが科学界で生き残ると、あれだけのことをやっても生き残れるなら自分たちもやってもいいじゃないか、というモラルハザードを誘発しかねない。だから、研究

の世界に居続けてはいけないと思います。」

言論を捏造記事でミスリードした記者も同じだ。まして、人を教え導く仕事に就く資格は無いし、その事も分からず大勢の弁護団を恐れて雇用する学校は、教育や生徒の健全な育成に誇りも責任も持たないと発表したのと同じだ。

そんな名ばかりの学校で学ぶ価値は有るのだろうか？

朝日新聞や朝日放送など「反安倍」を標榜する人達はその後、代表者を替えても組織の改革には手を付けず、自分達の主張を代弁してくれそうな論客を迎えてアピールを狙ったが、逆に手をかまれる始末だ。

あの元経済産業省の官僚だった人の主張は『熱風』二〇一五年二月号で読んだが、あそこまでいくとファンタジーだし、憶測や根も業もない想像か新聞や放送で報道出来ると思う人が官僚を務めていたなんて驚くばかりだ。しかもこの人の本音は、安倍首相の政治に反対しているのではなく、安倍政権の官僚として活躍している元の同僚や上司を叩き潰したい、引きずり降ろしたいと言う復讐心が見え見えだ。こんな人を旗印として担ぎ出して来たのだから、朝日系列もよっぽどの人材不足か行き詰まりだ。もう降参しちゃえば？

だって、こんな人に「どうやって日本を守るんですか？」と聞いても『日本の友達をどんどん増やして行って、それも武器でつながりを作る友達ではなく、経済的な関係とか、文化的な関係でつながりを深めて行って、それで中国が何か日本に変なことをしそうになったら、そのときには協力してくれ、と。国際世論がみんな非難してくれと。国連で議論してくれとということに圧力をかけていくほうが、はるかに安全保障として強いと思うんです。』とか『もっともっと引いて「いやいや、靖国なんか行きませんよ、中国の人がいやがることは、私達はしません」あるいは「軍拡競争には乗りませんよ」というような宣言をしたほうが、はるかに味方が出来るんです』なんて言うし。(『熱風』2015年2月号)

国連頼みと、譲れば分かってくれるだろう主義・・・自分では何もしない、お為ごかしやね。自分の目的ではないから、まともに考える気もないんでしょ。

この発言には、『ゲート 自衛隊 彼の地にて、斯く戦えり』（柳内たくみ著 アルファポリス刊）の文言を返したい。

『国際社会は、小中学校の教室と同じです。いいですか？ 国連という名の教師は理想主義の無能者揃いです。そのせいで教室の中は力と数の論理が支配しています。そんなところで周りから舐められた子供はどうなると思います？ 周りから虐められて筆(むし)られて、その上皆から笑いものとなっても、誰にも助けて貰えないんです。虐められなければ、手を出してきた相手に必死になって噛みついて、こいつを怒らせたならヤバイって思わせるしかないんです。

国家は愛されたり、親しまれたりするだけじゃいけません。国民や国益を守るには、どこかで恐れられてなければダメなんです！』

『自国を自分で守る意思を持たない国を助けてくれる国なんてこの世にあるはずないじゃないですか！』

青少年に人気のライトノベルにも、これくらいのことは書かれているのに、**不勉強だわ**。現実でも、国際社会が非難するだけでロシアがひっ込んでくれるんなら、**ウクライナも苦勞せんで済むのに**。

だいたい、この元官僚だって、誰も自分を擁護してくれないから懸命に自力で戦っているんでしょ。職場で相手に譲ったら、立ち場は良くなったんですか？

自分が全然信じていないことをシラッと人に勧めろって、どんだけ根性悪やねん。

朝日系の人達が、どうして懲りないかはまた別の話として、今回は「なぜ左向きの人達が言うことは机上の空論なのか」を考えたい。

『文・堺雅人』（文巻文庫刊）で、『ジェネラル・ルージュの凱旋』の撮影のあいまに長編小説『坂の上の雲』を読んで考えたことを堺雅人さんはこう書いている。

『軍人でない僕にはよくわからないけれど、軍という組織には、秩序や規律という、「平時」のアタマとおなじくらい、独創や臨機応変といった「戦時」のアタマが必要なのだろう。「戦時」が幅をきかせすぎると收拾がつかないが、「平時」のことばかり気にしているといきいきとした思考がうしなわれる。両者はバランスが大事なのだ。そしてまた、医者でない僕にはよくわからないことだけれど、このことは病院という組織にもあてはまらないだろうか。

部外者の僕には、救急医療がしくみとしてうまくいっていないのは、ただ、「戦時のアタマ」でかんがえるべきことを「平時のアタマ」でかんがえていることが原因なんじゃないか、とすらおもえるのだ。』

自衛隊をいまだに否定したり、国や国民を守ることを他人任せにしようとする人達は、「戦時のアタマ」で考えるべきことを「平時のアタマ」で考えているから非現実的だし、実際には役に立たないんだと思う。

スタジオジブリの宮崎駿監督は『熱風』2015年4月号掲載のインタビューで、こう話をされている。

『前と同じ論法で平和憲法を守っていれば平和になるんだというような考え方でやれるほど、世の中は甘くなくなってきたのも確かだと思います。いろんな要素や要因が増えて、膨らんでうごめいている。そういう時期に来たんだと思うんですよね。』
こんな時代に現実を見ず、状況も理解せず、希望的観測だけで突っ走る人が国政に携わっていたら、物凄く迷惑だ。あ、鳩山元首相って、まるっとこのタイプ・・・というより、民主党政権時の総理は、全員がコレだったのね。うわあ、ゾツとした～。

彼らは、自分が好む思想にあぐらをかいて、現実に取り残されてしまったのだろう。

それはやっぱり、寄生と思考停止なのだと思う。ハッキリ言って、怠惰なだけ。

私達国民や、守らなければならない国を見ようもしないで、国税でお給料を貰うのは、厚かましすぎるやろ～。

恐ろしいことだが、寄生と思考停止は、どの時代、どんな立場の人でも陥りやすいものだ。私たちもおごり高ぶらず、真摯に気をつけようと思う。

これから私達は、ますます「戦時のアタマ」で考える必要に迫られるだろう。

で、どうするかというと、やっぱり自衛隊に頼ることになりそうだ。

最近「イザと言う時」というより、「困ったら自衛隊」「何かと言えば自衛隊」で、なんでもかんでも「自衛隊にお願いすれば何とかしてくれる♪」と、便利使いしすぎだと言われている。

しかし、数々の大きな災害に立ち向かってきた自衛隊は「戦時」のスペシャリストだ。一般人が聞こうとしない非常ベルに耳を澄ませ、危機に対処する為に、日々努力を積んでこられた方達だ。東日本大震災では、民主党政府が犯した数限りない失態を乗り越えて、国土と国民を守ってくれた。

平穏な日々が続く「平時」に、次ぎの一手を打っていなければ、あんな活動は出来ない。

「戦時」が来ることを想定して準備していたから、大きな組織が迅速な行動を起こせたのだ。自衛隊に素直に教を乞えば良い・・・と思う人は、行政にも自治体にも多いらしく、最近防災行事や避難訓練に自衛隊が参加するケースをよく見る。

小学校や中学校でも「自衛官が教える防災の授業」があったら、とても良いと思う。

私達に必要なのは、危機や非常時が来ないことを願ったり、漫然と見ぬふりをするのではなく、危機に備えて考えたり準備を整えるといった、次の一手を打つことだ。

日本の航空会社の客室乗務員は、非常事態の訓練で「絶対に死んではならない」と叩き込まれるそうだ。「あなた達が死んだら、誰がお客さんを安全な場所に誘導するのか」と。自衛官も同じだと思う。「危険を顧みず」と宣誓していても、無理な我慢で任務を遂行してはいけない。それでは責任放棄になってしまう。

私達国民も、自衛隊が十分に実力を発揮出来るよう、自衛官の安全に全力で責任を持とう。
その為に必要な法整備は、私達国民の責務だ。
自衛官である彼ら彼女らは、大阪弁で言う私達の近しい知人「うっとこの子お」なのだから。

立ちすくむことも、尻込みすることも出来ない厳しい局面だが、私たち国民は、自衛隊をやるべとして、この大変な時代に踏み出して好きたいと思う。